

# 家庭果樹の栽培……(五)

北大農学部園芸学教室  
助教授 田村勉

寒い北海道でも三月に入ると、鶯の声にはほど遠いにしても、どことなく春らしい気分が漲ってくる。

果樹栽培につきものの剪定(枝切)は二月下旬から三月にかけてが酣である。だんだんと日の長くなつた暖い日の昼下りなど、家庭にある二・三の果樹にも自然に缺を入れたくなるのが人情である。今回は「枝切」について述べることにする。

## 果樹の結果習性

(枝に果実の着く習性)

「ももくり三年かき八年」(実際には接木された柿はくり同様四〜五年で果実が着き始めるのであるが)で、植付けて四〜五年経てば「和なし」「ぶどう」「うめ」「くり」等が、六〜七年も経てば「りんご」や「洋なし」が成り始める。しかしこの果実は出鱈目に着くのではなく、一応一定の規則に従つて花芽が出来、花が咲いて結果するのである。それで、果してどのような枝に花芽(これが発育して花が咲き果実になる)が出来結果するものなのか、それぞれ作つている果樹の結果習性を予め知つて置くこ

とが、枝切を実施する上に極めて大切な事である。

次に北海道に作られている主な果樹の結果習性と、枝切を行う場合の注意について述べて見よう。

## 結果習性の区別

各種果樹の結果習性を大体次のように分けることが出来る。

1 その年に伸びた枝(新梢)に結果するもの。例 ぶどう、くり等。

2 前年の年に伸びた枝に結果するもの。例 もも、うめ、さくらんぼ、グースベリー等。

3 前年の年に伸びた枝の先が僅に伸長してその頂端に結果するもの。(新生した枝に果実が着くのは普通三年目である)例 りんご、なし。

次に果樹の種類毎に少し詳しく述べて見る。前にも一寸書いたように、花が咲き果実が成る為には先ず花芽が出来なければならぬ。そして大部分の果樹は前年の成育中に花芽が出来、その後次第に発育して翌年の晩春から初夏にかけて開花する。この

表 1 各種果樹の大凡の花芽分化期 (各試験場の調査から)

種類	分化期
りんご	6月下〜8月上旬
ななし	6月〜7月
ぶどう	6月
さくらんぼ	7月
もも	8月
くり	7月

ある。(表一参照)従つてその花芽が枝のどの部分に着くかが先ず問題になる。  
一 ぶどう(家庭果樹としては甚だ多いので少し詳しくのべよう)  
◎花芽の着く位置「図1」で解るように新

梢(その年にのびる枝)が伸びながら葉腋(葉と枝の間)に花芽をつくる。この枝を結果母枝(種蔓)と呼んでいる。種蔓になる枝は伸び過ぎず、弱過ぎず中等の枝で日当りの良いところにある充実したものでなければならぬ。そして余り遅れて伸長した部分には花芽が着かない。中庸の枝ならば少くも基部から、普通は3/4位の芽は総て花芽と見てよい。

◎果実の着く位置  
従つて秋剪定する時にはその年に伸びた良好な枝の先を適宜切つて、花芽の部分を残して置くと「図1のB」に見るように翌年はそれから枝(結果枝)が萌出して果房が

図 1 果樹の結果習性図解

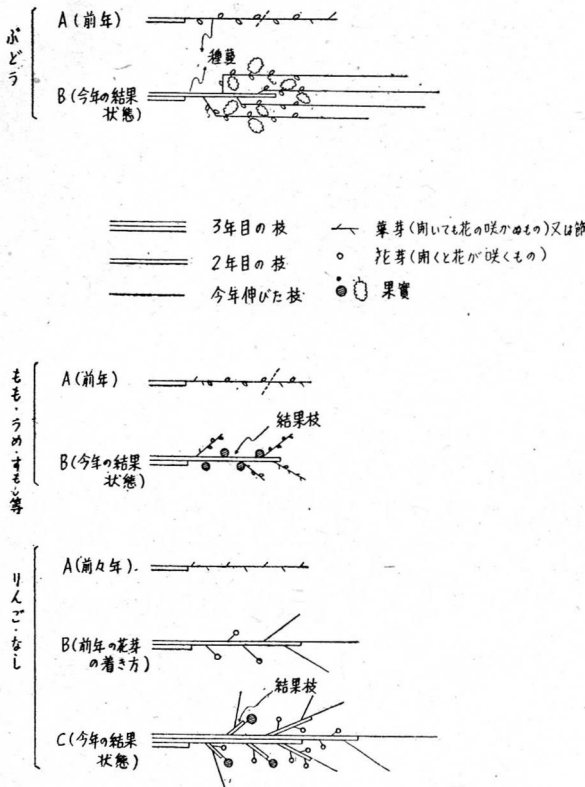
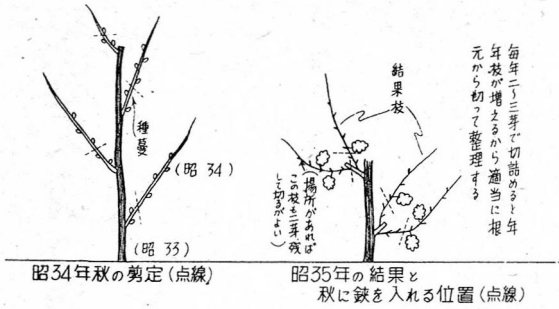
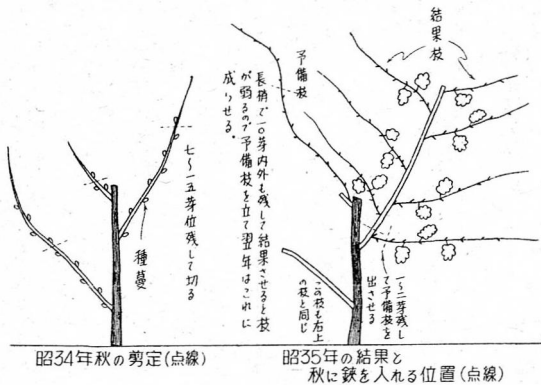


図2 ぶどうの剪定模式図

短梢剪定



長梢剪定



二〜三個宛着くことになる。いい換えると春先に見て前年発育した枝に良好な芽が五個あつたとすれば、少くも一〇房内外の果実が収穫出来ることになる。普通北海道でつくられているぶどうは、種蔓についている花芽が伸び出すと、第三〜四節目位から連続二〜三節に亘つて果房が着く習性を持つている。総ての枝を種蔓として残すと翌年は枝が混合つて日当りが悪くなるから、適当に根本から整理して必要なだけの種蔓を残すようにする。管理が良好であれば果実の着成した結果枝の腋芽は花芽に分化するので、翌年の結果母枝(種蔓)として用いることが出来る。

◎剪定(枝切)

ぶどうはりんごなどと異り蔓性の果樹であ

るから剪定もおのずから違つて来る。家庭で栽培する場合正規の棚仕立にするか、軒先に誘引するか、あるいは棒仕立にするか等により枝の切り方は異なるが、大別すると次の二種になる。

短梢剪定

種蔓の長さが極めて短い場合で、晩秋剪定の際基部のはつきりした芽を二〜三芽残し、その先を切り去るものである。従つて種蔓の長さは五芽前後となる。翌春萌出して来る芽の中、蔓の伸びる場所の広さによつて普通は一本、附近に枝のない場合は伸びのよいもの二本を残し、他は小さい中に掻取るのである。毎年同様に基部の芽一〜二芽で切詰めるので年の経過と共にその部分は「しゅうが状」になり易い。しかし

枝の配置が決ると毎年規則的に切詰めるだけなので初心者には行い易い方法である。(図2参照)

長梢剪定

種蔓を長く残すもので、普通芽を七〜八芽位着けている。従つて前者に比し種蔓の本数は少い訳である。

図2に見るように長梢剪定では一本の種蔓に多くの結果枝がついて結果するので、毎年繰返し長梢剪定を行う為には適当な種蔓を得難い。それで一〇芽位も残して切返す場合は果実を着けない予備枝を養成して、翌年はこれを種蔓として果実を生産する。即ち実を着けている枝の側に翌年の種蔓を伸ばして置いて、毎年交互に結果させる訳である。

- 大体次のような場合である。
- 1 剪定のやり過ぎ、即ち余り蔓先を切詰めたり、種蔓の数を制限し過ると花が少く、実止りも悪い。ある程度迄蔓をのびのびと伸ばすことが必要である。
  - 2 反対に蔓が繁茂し過ると日当りが悪くなり、蔓の充実が悪いために種蔓に花が少く、しかも止りが悪く熟期が遅れる。(一般家庭ではこの場合が多い)
  - 3 湿度が高過ぎ、更に窒素肥料だけをやり過ると2同様の結果になる。
  - 4 品種の中開花時に他品種の花粉を受けないと、いくら花が着いても実の止らぬものがある。北海道で作られているものでは「ブライトン」(大粒の茶ぶどう)がそうである。

種蔓の長さが短梢と長梢の中間に入るものを中梢剪定と呼んでいる。中梢位迄は普通予備枝を必要としない。

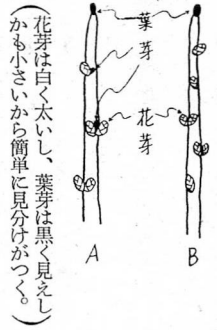
両者の何れを用うべきかは品種によつて異り、蔓の勢力のさかんな「ナイヤガラ」「デラウェア」等は長梢がよいといわれている。しかし同一品種でも作る土地の肥沃度、肥料特に窒素の多少、あるいは土壤の湿度等で一様に断定することは出来ない。何れにしてもこれはぶどう剪定上の基本形であつて棚仕立等に於ける実状は根株に近い空間に余裕のない部分では短梢を、段々先に移るに従つて中梢を、最先端で場所があれば樹勢を考へて長梢あるいはこれに近い剪定が行われる。家庭で植えられるぶどうで、非常に蔓は優勢だがさつぱり結果しないという話をよく聞くが、これは

◎結果枝になるべき枝(花芽を着け易い枝)

日当のよいところに出来た充実した枝で

図3 ももの枝の

芽の状態



(花芽は白く太いし、葉芽は黒く見えし  
かも小さいから簡単に見分けがつく)

なければならぬことは共通であるが、外見上種類により長さが多少異なる。

もも、三〇〜一〇〇彦齋位の枝に良い果実(花芽)がつく。一〇彦齋内外の枝にも花芽はつくが果実が感心出来ないので普通着果させない。

うめ、すもも、あんず、これ等は一〇彦齋位の短い枝に花芽が着き、良好な結果をする。長目の枝をそのままにすると、短い枝が分枝してこれに花芽が出来翌年結果する。

さくらんぼは前二者の仲間に入るが比較的短い枝が良いようである。

剪定する上での特色

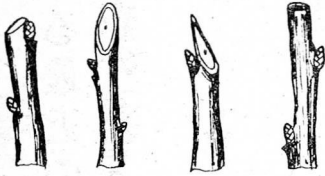
1 枝の各部に日が当るように樹を仕立てる必要があるので、一齋〜一五齋位の高

図4 枝の切り方



A...可  
B...不可  
C...不可

切残しの部分が枯れて腐れ込みを生ずるおそれがある。傷口が大きくなつて癒傷が遅れる。



A...可  
B...不可  
C...不可  
D...ぶどうでは可

芽の上に枝(ホソ)を残して切るとこの部分から枯込みを生ずる恐れがある。又急傾斜の過ぎ乾き易く枯込みし易いので芽が乾き易く、養分の分配が甚しく、芽は枯れる。他の果樹では同様に枯込み易くうまくない。

さで芯を抜き主枝(最も基本になる大きな枝)を四〜五本出来るだけ四方に外側に向けて出す。(主枝と主枝との間隔は出来るだけあける)

2 長短にかかわらず枝の先端に着く芽は必ず葉芽(枝の伸出して来る芽)である。しかし葉腋(葉と枝との間)につく芽は、花芽又は葉芽が単独で一個ずつ着く場合から、一節に二〜三個がいろいろの組合せで着く場合がある。(図3参照)図3Bの様な枝の先を切返すと、残るのは総て花芽であるから花が咲いて結果するとその枝からは新梢が出ない。(果実が着くのは必ず前年伸びた枝であるから、いい換えると将来共この枝からは実がとれない)従つて枝先が切返す場合は必ず葉芽を残して切るようにしなければならない。

3 特にももは花芽が多くつくつと、その部分が空き易く、結果部が段々枝の先端部へ移行するから長果枝(花芽のついた長い枝)は三〇彦齋内外、短果枝は二〇彦齋位に切詰めて新梢の発生を促すことが大切である。

三りんご、なし

◎花芽及び果実の着く位置 この種のものは立前として花芽が枝の先端に着くのが特色である。図1で見える様に、一本の枝に出来た腋芽が翌年ある程度伸長して、その先端に花芽を分化する。更にその翌年花芽が萌出すると僅に新梢が伸び、先端に通常五個の花が開いて結実する。このように一本の枝が発生してこれに開花するのに三年を要するので、三年生結果枝の果樹ともいわれる。

しかしりんごの「紅玉」和なしの「長十郎」等はもも、うめ等と同様、伸びつつある新梢の葉腋に花芽が出来、翌年開花結実する場合がある。これをりんごなしの腋花芽形成と称している。長十郎等では果実生産に利用出来るが、りんごでは腋花芽の果実は一般に劣り、且つ枝が弱るので、特別の場合以外は利用することなく摘果するのが普通である。

剪定上の特色 この種の果樹は枝を伸びつつある新梢、先端に花芽をつくりつつある枝、開花結実している枝の三種に分けて考えることが出来る。それで剪定に当つては今年新しく枝を伸ばす為の葉芽(細く扁平)を持つた枝、昨年伸びて今年花芽をつくらせる枝、今年結実する確実な花芽(丸味があつて大きい)をもつた枝を適当に混合して残すように心掛ねばならない。でなければ「成り年」と「不作年」が出来て均産が望めない。

更に花芽が枝の先に着くので枝先に缺を入れ過ぎると、花を切捨てることになり取量が減ずる。特に長果枝(長い枝の先に花芽のついたもの)を生ずる品種では注意せねばならぬ。

果樹の剪定期

樹の生育が中止している時期の剪定(冬季剪定)は、晩秋落葉後から春先芽の動き出す前迄に終らねばならぬ。しかし余り寒さのほげしい時期は傷口の癒合が悪く、寒害にかかり易いので、一月〜二月上旬にかけての厳寒期は避け、二月下旬〜三月にかけて行うのが普通である。ぶどうは道南を除き、冬季寒害のおそれがあるので秋に棚下しをする。この関係で晩秋落葉後剪定をして引き下し、積雪下にして防寒するのがよいのである。

寒害、積雪による蔓傷みのないところでは春先樹液の流動を始める前に行うがよい。遅れると樹液が切口から流出して癒合が悪く、樹体をも消耗させることになる。果樹剪定(枝切)上の一般注意

1 若木の中は余り枝を切らぬようにして、葉の数を多くする事が、樹の生長を早め、早く結果期に入り収量を高める。樹が古くなるにつれて剪定を強くする。

2 一般的な考え方からすれば混み枝を整理する様な場合比較的大枝(りんご等では五〜七年生)を対照にし、缺で小枝に余り手を加えぬこと。

3 従来は盆栽の様に枝を曲げて「ジグザグ形」にした傾向があるが、品質のよいものを多取するには枝は出来る限り真直に伸ばすように心掛けるがよい。

4 出来るだけ同じ個所から枝を多く出さないこと。主枝等太い枝程この事が大切である。

5 枝の切り方は「図4」に示す通りである。又大枝を鋸で切つた場合は、切口をナイフ等でなめらかにし、出来得ればペンキ、蠟類、墨汁等を塗つて防腐するがよい。